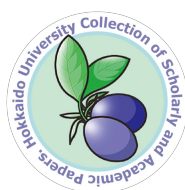




HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	日韓漢語動詞における通時的対照研究：前期現代語を中心として
Author(s)	趙, 恵真
Citation	研究論集, 15, 195(左)-211(左)
Issue Date	2016-01-15
DOI	https://doi.org/10.14943/rjgsl.15.l195
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/60556
Type	departmental bulletin paper
File Information	15_016_cho.pdf



日韓漢語動詞における通時的対照研究

— 前期現代語を中心として —

趙 恵 真

要 旨

本稿では、前期現代語における日韓漢語動詞の形態的特徴を明らかにした上で、現代の日韓漢語動詞とはどのような相違点がみられるかについて対照考察を行う。

日韓両言語には、漢語の後部にスルと *hada* がそれぞれ結合して使われる場合が多く、この場合、「漢語＋スル」と「漢語＋*hada*」には比較的整然とした対応関係が見られる。このような「漢語＋スル」と「漢語＋*hada*」の形態を本稿では「漢語動詞」と呼び、日韓両言語それぞれをスル形、*hada* 形と称する。しかし、語彙によってはスル形と *hada* 形が対応しない場合がある。例えば、日本語ではスル形でしか現れないものが、韓国語においては *hada* 形の他に「*doeda* (なる)」、「*sikida* (させる)」、「*chida* (打つ)」、「*danghada* (負う)」、「*gada* (行く)」などの動詞が漢語と結合して現れる場合がある。このような事実をふまえて、前期現代語における日韓両言語の漢語動詞の形態的特徴について考察を行った結果、現代語とは異なる形態的特徴及び対応関係がみられることが明らかになった。また、対応関係から A, B, C, D, E の 5 パターンに分類できた。A パターンは現代語と前期現代語においてスル形と *hada* 形が対応する場合である。日韓両言語においてもっとも生産的な形態であるといえる。B パターンは日本語の現代語と前期現代語ではスル形で現れるが、韓国語の現代語では *hada* 形以外の形態を取る場合である。B パターンは韓国語の前期現代語において *hada* 形以外にどのような形態を取るかにより、さらに 4 つに下位分類できる。C パターンは前期現代語では日韓両言語とも漢語動詞として現れない場合である。D パターンは日韓両言語とも前期現代語では漢語動詞で現れたものが、現代語では漢語動詞として現れない場合であり、E パターンは韓国語の前期現代語でのみ漢語動詞で現れる場合である。

1. はじめに

日本語と韓国語には、それぞれ「漢語¹＋スル（スル形）」と「漢語＋hada²（hada 形）」の形を取る語の形態が存在し、たとえば「運動，研究，努力」は、日本語では「運動-する，研究-する，努力-する」になり，韓国語では「運動-hada，研究-hada，努力-hada」になり動詞化する。このように漢語にスルと hada がついて動詞化したものを本稿では「漢語動詞」と称する。

なお，日本語ではスル形を取るが，韓国語では hada 形を取らない場合もある。

(1) a. 子供と一緒に運動した。

b. 人間は矛盾した存在だ。

c. パソコンが故障しても大丈夫です。

(2) a. ai-wa hamkke 運動-ha-yeoss-da.

子供-と 一緒に 運動-する-過去-終止

b. ingan-eun 矛盾-doe-n jonjae-da.

人間-は 矛盾-なる-連体形 存在-終止

c. keompyuteo-ga gojang-na-do gwaenchanh-da.

パソコン-が 故障-出る-も 大丈夫-終止

(1a) と (2a) は漢語にスルと hada が結合し，漢語動詞となった例である。これは日韓両言語において漢語を動詞化する方法であり，生産的である。

(1b-1c) と (2b-2c) の場合，日本語ではスル形が取られているが，韓国語においては hada 形以外の「doeda (なる)」と「nada (出る)」がそれぞれ用いられている。

本稿では，(2b-2c) のような hada 形以外の例までを考察対象に含め，両言語の現代語と前期現代語³における漢語動詞の形態にみられる特質を明らかにしつつ，対照言語学的考察を行う。

¹ 韓国語では「漢字語」という用語で使われているが，本稿では，日本の用語に従って「漢語」に称する。そして，韓国漢字は便宜上日本漢字で表記する。

² 韓国語の転写は「国語のローマ字表記法」に従う。「国語のローマ字表記法」は，2000 年 7 月 7 日文化観光部告示第 2000-8 号であり，韓国語における現行のローマ字表記法である。「ㄱ, ㄷ, ㅂ, ㄹ」は母音の前では「g, d, b, r」で，子音の前や語末では「k, t, p, l」で転写するが，論文などの特殊分野での転写は，「ㄱ, ㄷ, ㅂ, ㄹ」は「g, d, b, l」のみ用いる。本稿は論文などの特殊分野と見なし，前述した規則に従うことにする。

³ 関 (1995) では，1910 年から 1945 年までの韓国語を「前期現代国語」と述べており，1945 年以降の韓国語を「後期現代国語」と述べている。一方，『概説日本語の歴史』(1995) では，明治以降 (1868 年以降) を「現代日本語」として定義している。本稿では，現代日韓両言語との区別のため，便宜上，

2. 先行研究

日韓両言語のもっとも基本的な動詞の一つであるスルと hada は、多様な用法を有しており、互いに類似した性質を持っていることから日韓両言語の対照研究の分野において、もっとも取りあげられやすいテーマの一つであるといえる。本節では、日本語におけるスルと韓国語における hada に関する先行研究について概観する。

2.1. スル・hada に関する先行研究

日本語のスルに関する先行研究として山田 (1908, 1936), 村木 (1991) が挙げられ、スルを「形式用言」や「機能動詞」と捉えており、実質的意味がなく文法機能のみを果すと述べている。

まず、山田 (1908) は「形式用言」を「実質用言の補欠部分にして、其の属性的觀念極めて広汎にして、唯、思想の形式的能力をあらはすに止まるが如き性質の用言なり。之を使用するには殆大抵実質ある語を添へざるべからず (1908: 312)」と定義し、スル⁴ が「形式用言」に属されていると述べている。なお、スルに関する説明を行っている際には以下の例をあげている。

(3) a. 名詞を動詞とするもの

音す、心地す、罪す、尽きす、欲りす

b. 漢語を動詞とするもの

研究す、分配す、奏上す、勉強す、依頼す、利す、要す、議す、論ず、案ず、観ず

c. 外国語を動詞とするもの

祝 (プレス) する、詛 (ウオー) する⁵

また、山田 (1936) は、(3) をあげつつ「この「す」といふ動作は名詞、漢語、外国語等を動詞とする力を有する (1936: 256)」と述べ、和語、漢語、外国語を日本語の動詞とするにはスルを後部に添えるのを普通とすると説明している。それに対し、村木 (1991) は「機能動詞」を「意味論上の任務から解放され、単語よりも大きな単位であるシンタグマを構成するための形式的、文法的な役目を担っている (1991: 204)」と捉え、以下の例をあげている。

(4) a. なにか におう。

1910 年から 1945 年までの時期の両言語を前期現代語と称することにする。

⁴ 原文は、「す」と称している。

⁵ 原文は、「庶幾は祝 (プレス) する處多くして詛 (ウオー) する處鮮からしめよ (1908: 257)」である。

b. なにか においが する。

(4) について村木 (1991) は、(4) の a と b の文はそれぞれ下線部の形式が異なっているが、同義性が保たれているとみなすことができると述べている。そしてこの (4b) にみられるスルを「機能動詞」と称し、日本語の最も基本的な動詞の一つで機能動詞の典型的例であると説明している。この説明は山田 (1908) の「形式用言」に関する説明と類似した点である。

一方、韓国語の hada は日本語のスルと同様、使い方が多彩であり、従来から多くの研究者に注目されてきた。代表的な先行研究として、崔 (1929) と徐 (1975) があげられる。

崔 (1929) では、hada を本動詞・補助動詞・補助形容詞・接尾辞の四つに分類しているが、本稿で注目したいところは名詞を動詞化とする転成接尾辞として解釈した立場である。

(5) a. il-hada 仕事-する

b. yeongu-hada 研究-する

崔 (1929) は hada を名詞の後部に結合し、その資格を変える転成接尾辞として扱われる場合があると述べている。(5) の a と b の文は韓国語の固有語である「il (仕事)」と漢語である「yeongu (研究)」の後部に hada を結合し、それぞれ「il-hada (仕事-する)」と「yeongu-hada (研究-する)」という動詞となる。しかし、転成接尾辞として扱わず、形式的な動詞、即ち「形式動詞」として見なされる可能性もあると述べている⁶。

それに対し、徐 (1975) は、先行要素の意味分析に主眼を置き、hada の機能を一貫して規定しようとしている。hada の先行要素は実体性と非実体性に大きく分けられ、先行要素が実体性を持つ要素である際には他の適切な動詞を代理する「代動詞」として、先行要素が非実体性の要素である際には実質的意味を持たず、単に述語化する機能でしか果たされない「形式動詞」として捉えられると述べている。そのうち、「形式動詞」としての hada の主な機能については漢語や外来語の後部に hada を添え、動詞の形態を作ることであると述べている。

以上の先行研究を踏まえつつ、本稿では漢語の後部にそれぞれスルと hada が結合して使われる場合、そのスルと hada は本来の実質的な意味を失い、漢語を動詞化する機能的役目を担っていると解釈する。

⁶ 「「hada」を接辞として扱わず、一種の形式的用言（形式的な動詞，形式的な形容詞）として見なし，名詞に「hada」がついて作られた動詞と形容詞を複詞として扱うことが出来るだろう（1929：674）」（“하다”를 써가지로 보지 아니하고 일종의 형식적 풀이씨（형식적 움직씨, 형식적 그림씨）로 보고서, 이름씨에 “하다”가 붙어서 된 움직씨와 그림씨를 겹씨(複詞)로 풀 수도 있을 것이다.)

2.2. スルと hada の対照に関する先行研究

従来、日韓漢語動詞における対照研究は、ボイス（態）に関わる研究が盛んに行われてきている。これらの研究は日本語のスルと韓国語の hada の先行要素が漢語名詞になる場合を研究対象としており、主に「スル-hada」と「サレル-doeda」の対応関係に焦点を合わせたボイス（態）に関する研究であった。漢語動詞の対照に関する対照研究は、生越（1982）から始まったと思われる。

生越（1982）は、日本語の「漢語＋スル」と韓国語の「漢語＋hada」において非常に生産的な形であり、その形態の取り方は一般の動詞に比べ単純かつ規則的なものである点に類似していると述べている。そして日本語教育の側面から主に漢語動詞を取りあげ、日本語の漢語動詞における能動形と受動形の意味的関連性とその相違を韓国語の hada との対照を通して明らかにしている。

その以降、漢語動詞における対照研究は、主に日本語のスル形と韓国語の hada 形の対応関係について行われ、各時代の漢語動詞の様相を時間軸に沿って連続的に捉えるという視点の通時的対照研究は見当たらない。

3. 日韓漢語動詞の様相について

本節では、現代語と前期現代語における日韓漢語動詞の用例⁷をあげながらそれらの形態的特徴および変化を考察し、最後に対照考察を行う。

3.1. 日本語における漢語動詞の様相

まず、現代日本語における漢語動詞の形態を示す。

- (6) a. 子供と一緒に運動した。
- b. 人間は矛盾した存在だ。
- c. 男性を魅了する魔法の言葉。
- d. 監督が拍手する場面もあった。
- e. 負傷した兄の代わりに弟を起用した。

⁷ 前期現代語の用例はそれぞれ韓国語の方は『東亞日報』と『三千里』、日本語の方は『読売新聞』と『太陽』を用い、現代語の用例は筆者の作例である。『太陽』は1895年から1928年まで日本で発行された大衆雑誌であり、『三千里』は1929年から1942年まで発行された月刊総合雑誌である。

また、用例の下線は筆者により、便宜上『東亞日報』は『東亞』に、『読売新聞』は『読売』に表記する。

- f. お父さんがアメリカへ出張しました。
- g. 米国が了解するとは思えないとの意見が多いようだ。
- h. パソコンが故障しても大丈夫です。

(6) から分かるように現代語の漢語動詞はスル形にほぼ固定化している。(6a) は現代韓国語においては hada 形に対応するものであり、日本語のスル形と韓国語の hada 形はもともと生産的であり、漢語動詞を作る上で非常に重要な形態である。しかし (6b-6h) の漢語は、現代韓国語においては hada 形以外の形態を取るものである。

以下の (7) と (8) は、(6) の漢語動詞が前期現代語においてはどのような形態を取っているのか示したものである。

- (7) a. 常に激しく運動してもいゝやうになっている。(『太陽』1925)
- b. あまりに矛盾した態度だ。(『太陽』1925)
- c. 登山者を魅了するお花畑の美観。(『読売』1931)
- d. 飛行機を仰いで拍手する尾崎氏令妹。(『読売』1915)
- e. 右腕に負傷した。(『太陽』1917)
- f. 公使代理として出張することに決つた。(『太陽』1925)
- g. 宗教を了解する方法。(『読売』1929)
- (8) a. 英一周機に故障を生ず。(『読売』1924)
- b. 故障が起ると逃出した運転手。(『読売』1930)

(7) から分かるように前期現代語の漢語動詞はスル形のみ取っているが、(6h) の「故障」の場合は (8) のように「-を生ず、-が起る」でも現れることが分かった。

一方、現代語では漢語動詞で現れていないが、前期現代語においては漢語動詞として現れて

いる場合もある。

- (9) a. 兄として妹を教養する。

(『読売』1914)

- b. 避暑しながら稼ごう。

(『読売』1927)

- c. 言ひながら、独りで微笑した。

(『太陽』1925)

「教養」は前期現代語においては「教えて育てること」という意味を表しており、漢語動詞として使われていたが、現代になってから「個人の人格に結び付いた知識や行い」の意味のみで使われるようになり、漢語動詞としては用いられなくなった。語彙の意味変化に伴い、漢語動詞の使われ方にも影響が及んでいると考えられる。

「避暑」は現代語では漢語動詞として用いることが少ないが⁸、前期現代語においては(9b)のように漢語動詞として現れている。「避暑」の場合、現代語で「避暑に行く」または「避暑へ行く」という形態で現れており、この形態は韓国語の場合と類似しているが、韓国語では「避暑行く」のように助詞なしの形、または「避暑を行く」から分かるようにヲ格を用いて現れている点が興味深い。

「微笑」の場合、(9c)から分かるように前期現代語では漢語動詞として現れているが、現代語では漢語動詞として用いることは少なくなっており、主に「微笑む」という和語として使われている。

3.2. 韓国語における漢語動詞の様相

次に、現代韓国語における漢語動詞の例を(10)に示す。

- (10) ai-wa hamkke 運動-ha-yeoss-da.
 子供-と 一緒に 運動-する-過去-終止
 (子供と一緒に運動した)

- (11) a. ingan-eun 矛盾-doe-n jonjae-da.

⁸ 本稿で対象としている日本語の漢語について日本人にアンケートを取ってみた。そのうち例(9)について現代日本語では「教養する」は不自然であるが、「避暑する」と「微笑する」は使えそうと答えている。

- 人間-は 矛盾-なる-連体形 存在-終止
(人間は矛盾する存在である)
- b. namja-leul 魅了-siki-neun mabeob-eui mal
男子-を 魅了-させる-連体形 魔法-の 言葉
(男性を魅了する魔法の言葉)
- c. gamdog-i 拍手-chi-neun jangmyeon-do iss-eoss-da.
監督-が 拍手-打つ-連体形 場面-も ある-過去-終止
(監督が拍手する場面もあった)
- d. 負傷-dangha-n hyeong daesin-ida.
負傷-負う-連体形 兄 代わり-終止
(負傷した兄の代わりである)
- e. abeoji-ga migug-euro 出張-ga-ss-da.
お父さん-が アメリカ-へ 出張-行く-過去-終止
(お父さんがアメリカへ出張した)

(10) のような hada 形は漢語を動詞化する一般的な方法で、生産的である。前期現代語においても hada 形が取られる漢語は約 90% を占めている⁹。

(11) は hada 形以外の形態で現れる例である。まず (11a) は現代語では doeda 形が定着しており、漢語の後部について動詞化している。hada については語彙的な意味はなく、漢語を動詞化とする機能的役割を担っており、非常に生産的であるとすでに 2 節で述べたが、doeda も本来持っている「新しい地位を持つ」という語彙の意味を捨象して、漢語を動詞化する機能のみが用いられ、生産的であると考えられる。

また、(11a) の deoda 形は前期現代語においては hada 形を取る場合もある。

- (12=11a) ingan-eun 矛盾-doe-n jonjae-da.
人間-は 矛盾-なる-連体形 存在-終止
(人間は矛盾する存在だ)

- (13) a. inlyuae-wa 矛盾-doe-neun minjog-ida.
人類愛-と 矛盾-なる-連体形 民族-終止

⁹ 『三千里』コーパスから収集した漢語 3,935 語のうち、2,290 語が現代語にも残っており、その中で漢語動詞として現れているのは 2,075 語である。約 90% の漢語は前期現代語と現代語において漢語動詞として使われている。

(人類愛と矛盾する民族だ)

(『東亞』1923)

- b. gi-seoneon-gwa 矛盾-ha-da(go) un-ha-yeoss-da.
 その-宣言-と 矛盾-する-と 云-する-過去-終止
 (その宣言と矛盾すると言った)

(『東亞』1921)

現代語においては、(12) のように doeda でしか現れていないが、前期現代語では (13b) から分かるように hada 形も取っている。このような漢語は、「矛盾」以外にも「感染、麻痺、悪化、安定、汚染、共通、孤立、弱化、失踪、判明、変質、変形、分散、賣盡」などがある。

こういう現象においてユ (2005) は、(13) の場合 doeda も hada と同じく形式動詞としての資格を持っており、doeda と hada は同義語として扱うことができると述べている。本来 hada のみで意味領域の一部分を担っていたが、時代の流れによって doeda が担うようになり、ある時期になると hada と doeda が混在していると述べている。本稿ではユ (2005) により指摘されている hada と doeda が混在して用いられた時期が (13) の前期現代であると考えている。そのため、現段階では言い切ることはできないが、前期現代語において「漢語+hada」と「漢語+doeda」が同時に現れていることは言語変化における過渡期であると解釈する。

(11 b) の場合、現代語においては sikida が結合して用いられているが、前期現代語では以下の (15) のように漢語動詞として現れている。

- (14=11b) namja-leul 魅了-siki-neun mabeob-ui mal
 男子-を 魅了-させる-連体形 魔法-の 言葉
 (男性を魅了する魔法の言葉)

- (15) dogja-leul 魅了-ha-neun-geos.
 読者-を 魅了-する-連体形-こと
 (読者を魅了すること)

(『東亞』1927)

ただし、前期現代語でも以下の (16) から分かるように現代語と同じ形態がみられ、hada と「sikida (させる)」は混在して使われていると考えられる。

- (16) suman-eui dogja-leul 魅了-siki-eoss-da
 数万-の 読者-を 魅了-させる-過去-終止

(数万の読者を魅了した)

(『東亞』 1927)

(11c-11e) の漢語は、後部に「chida (打つ)」、「danghada (負う)」、「gada (行く)」が結合しているが、前期現代語においては以下の (20) のように hada 形で現れる。これらの例も日本語ではすべてスル形を取っているものである。

(17=11c) gamdog-i 拍手-chi-neun jangmyeon-do iss-eoss-da.
監督-が 拍手-打つ-連体形 場面-も ある-過去-終止
(監督が拍手する場面もあった)

(18=11d) 負傷-dangha-n hyeong daesin-ida.
負傷-負う-連体形 兄 代わり-終止
(負傷した兄の代わりだ)

(19=11e) abeoji-ga migug-euro 出張-ga-ss-da.
お父さん-が アメリカ-へ 出張-行く-過去-終止
(お父さんがアメリカへ出張した)

(20) a. gwanjung-ui 拍手-ha-neun solae-da.
観衆-の 拍手する-連体形 声-終止
(観衆の拍手する声である)

(『東亞』 1920)

b. 負傷-ha-n joseonin-ida.
負傷-する-連体形 朝鮮人-終止
(負傷した朝鮮人である)

(『東亞』 1920)

c. igos-e 出張-ha-jianiha-ges-da.
ここ-に 出張-する-否定-意志-終止
(ここに出張しないつもりである)

(『東亞』 1935)

このような形態の変化に関わる要因についてアン (2014) は、(20) のような種類の漢語は時間軸に沿って漢語に内包されていた動作性が失われ、hada 形より具体的な動詞と結合していると述べている。これらの現代語における形態を、どう解釈すべきかに関しては今後考察を深め

ていく必要がある。

一方、前期現代語では漢語動詞であったものが、時間の流れによって語彙そのものが無くなる場合もある。

- (21) ilbon-ui jeongchijeog jinsang-eul 了解-ha-lsuis-da.
 日本-の 政治的 真相-を 了解-する-可能-終止
 (日本の政治的真相を了解できる)

(『東亞』1920)

「了解」の場合、日本語では前期現代語と現代語で使われているが、韓国語では前期現代語でしか使われていない。現代になってからは、「了解」の意味の代わりに「諒解，納得，理解」などの語彙を用いるようになった。このような例として「了解」以外にも「拝見，上達，商売」などがある。

一方、現代語と前期現代語両方において hada 形を取らない例もある。

- (22) keompyuteo-ga gojang-na-do gwaenchan-da.
 パソコン-が 故障-出る-も 大丈夫-終止
 (パソコンが故障しても大丈夫だ)

現代語では (22) のように「nada」が定着しているが、前期現代語では (23) から分かるように多様な形態で現れており、漢語には常に助詞が付いている。

- (23) a. biche-e 故障-i saengha-ya.
 飛機-に 故障-が 生ずる-終止
 (飛行機の機体に故障する)

(『東亞』1920)

- b. guigye-e 故障-i saenggi-eos-da.
 電話-に 故障-が 生ずる-過去-終止
 (電話が故障した)

(『東亞』1920)

- c. 故障-i giha-da.
 故障-が 起る-終止
 (故障する)

(『東亞』1920)

- d. eotteon jadongcha-ga 故障-i na-s-da
 ある 自動車-が 故障-が 出る-過去-終止
 (ある自動車が故障した)

(『東亞』1935)

特殊な例として漢語「教養」,「避暑」,「微笑」の場合は,現代語では動詞化されていないが,前期現代語においては漢語動詞として現れている。以下の(24)は前期現代語における用例である。

- (24) a. igaewol dongan gyoyang-ha-yas-da.
 二カ月 間 教養-する-過去-終止
 (二カ月間教養した)

(『東亞』1933)

- b. cha-sa-e 避暑-ha-neun-ja da-hada.
 この-寺-に 避暑-する-連体形-人 多-する
 (この寺に避暑に行く人が多い)

(『東亞』1927)

- c. pyeonghwa-leul salang-ha-neun-ja-neun neul 微笑-ha-nda.
 平和-を 愛-する-連体形-人-は いつも 微笑-する-終止
 (平和を愛する人はいつも微笑んでいる)

(『東亞』1920)

「教養」は(24a)のように前期現代語では漢語動詞として現れ,現代語では名詞として用いられている。これに関しては,すべて3.1節で述べた通り,日本語の場合と同じ要因が働いた結果によるものと考えられる。

「避暑」の場合,(24b)から分かるように前期現代語では漢語動詞で使われているが,現代になってからは漢語動詞の形態ではない,「gada(行く)」という動詞と結合して使われている。以下(25)はその現代語の例である。

- (25) 避暑-ga-neun-nal
 避暑-行く-連体形-日
 (避暑に行く日)

(24c)の「微笑」という漢語の場合,前期現代語では漢語動詞であるが,現代語では「微笑」

の後部に「jisda (作る)」を用いて以下の(26)のように「miso (微笑) -jisda」の形態で使われている。

- (26) bo-neun i-deul-eul 微笑-jis-geha-nda.
 見る-連体形 人-複数-を 微笑-作る-使役-終止
 (見ている人たちを微笑させる)

一方、前期現代語においては漢語動詞として使われていたが、現代語になってから漢語動詞として現れなくなった場合もある。「休暇」、「懲役」という漢語は、日本語では現代語でも前期現代語でも漢語動詞で使われていない。

- (27) a. 休暇-ga-ss-da o-ass-da.
 休暇-行く-過去-て 来る-過去-終止
 (休暇を取ってどこかに行ってきた)
 b. 懲役-sal-daga nao-ass-da.
 懲役-住む-てから 出る-過去-終止
 (刑務所から出た)

- (28) a. ilgaewol-sig 休暇-ha-lsuis-da.
 一ヶ月-ずつ 休暇-する-可能-終止
 (一ヶ月ずつ休暇を取ることができる)

(『東亞』 1931)

- b. geu dangsi 懲役-ha-go nao-n-salam.
 その 当時 懲役-する-して 出る-連体形-人
 (その当時、刑務所から出る人)

(『東亞』 1936)

「休暇」の場合、(27a) から分かるように現代語では後部に「行く」を結合して使われており、前期現代語では (28a) のように漢語動詞で現れている。

「懲役」の場合も「休暇」と同じパターンであり、現代語では「懲役」の後部に (27b) のように「salda (住む)」が用いられており、前期現代語では (28b) から分かるように漢語動詞として使われている。「懲役」は「刑務所に拘置して一定の労役に服させる形」という意味を表している。前期現代語では自由刑の一つの意味として使われ、後部に hada 形をつけて「刑に服する」の意味を表していると考えられる。しかし、現代になってから「刑務所」という意味で使

われ、「懲役」の後部に「salda（住む）」をつけて「刑務所で住みながら労役などに服する」という意味として使用していると考えられる。

3.3. 対照考察

以上、現代語と前期現代語における日韓両言語それぞれの漢語動詞について述べてきたが、両言語における漢語動詞の時代による形態の様相を A, B, C, D, E の5パターンに分類して整理すると、以下の表1の通りである。

表1 日韓漢語動詞の形態のパターン

パターン	漢語	日本語		韓国語	
		前期現代語	現代語	前期現代語	現代語
A	運動, 発見, 破壊	スル	スル	hada	hada
B-1	矛盾, 感染, 麻痺, 悪化, 安定, 汚染, 共通, 孤立, 弱化, 失踪, 判明, 変質, 変形, 分散, 賣盡	スル	スル	hada doeda(なる)	∅ doeda(なる)
B-2	魅了, 魅惑	スル	スル	hada sikida(させる)	∅ sikida(させる)
B-3	拍手	スル	スル	hada	∅ chida(打つ)
	負傷, 失恋				∅ danghada(負う)
	出張, 逃亡, 避難, 移民				∅ gada(行く)
B-4	了解, 拝見, 上達, 商売				∅
C	故障	∅	スル	∅	∅ nada(出る)
D	教養	スル	∅	hada	∅
	避暑				∅ gada(行く)
	微笑				∅ jisda(作る)
E	休暇	∅	∅	hada	∅ gada(行く)
	懲役				∅ salda(住む)

A パターンは現代語と前期現代語において「漢語＋スル」と「漢語＋hada」で対応する場合である。「漢語＋スル」と「漢語＋hada」は日韓両言語においてもっとも生産的な形態であると

いえ、用例が多い。

B パターンは、日本語においては現代語・前期現代語とも「漢語＋スル」で現れ、韓国語では現代語においては「漢語＋hada」以外の形態で現れる場合である。B パターンは前期韓国語における形態の違いにより、さらに 4 パターンに下位分類できる。

B-1 パターンは、韓国語において前期現代語では「漢語＋hada」と「漢語＋doeda」の形態で現れていたものが現代語では「漢語＋doeda」の形態しか取らなくなった場合である。doeda も hada のように本来持っている語彙的意味はなく、漢語を動詞化する機能のみを持っており、且つ生産的である。そして前期現代語において「漢語＋hada」と「漢語＋doeda」の形態が混在していることは言語変化における過渡期であると解釈できる。

B-2 パターンは、前期現代韓国語では「漢語＋hada」と「漢語＋sikida」の形態で現われていたものが現代韓国語では「漢語＋sikida」しか取らなくなった場合である。この現象は前期現代語の時代までは hada のみで担当してきたものが現代になってからは sikida が hada の役割を担うようになったことを現す。

B-3 パターンは、韓国語において前期現代語では漢語動詞で現れるが、現代語では hada 形以外に漢語の後部に「chida (打つ)」、「danghada (負う)」、「gada (行く)」が現れる場合である。このパターンのような形態の変化について、アン (2014) は時代の流れによって漢語に内包されていた動作性が失われ hada 形より具体的な動詞と結合していると述べているが、このような形態をどう解釈すべきかに関しては今後考察を深めていく必要があると考えられる。

B-4 パターンは、韓国語において前期現代語では漢語動詞として現れている漢語が現代韓国語ではその語彙そのものが無くなった場合である。

C パターンは、前期現代語において日韓両言語とも漢語動詞として現れない場合である。現代語では日本語のみ漢語動詞として使われている。本稿で例として挙げている「故障」の場合、前期現代語においては漢語動詞として現れていなかった（常に助詞付きの形態であった）ものが、現代日本語においては「漢語＋スル」、現代韓国語においては助詞なしの「漢語＋nada」の形態で現れている。

D パターンは、日韓両言語とも前期現代語では漢語動詞として現れていたが、現代語では日韓語両者とも漢語動詞として現れていないパターンである。

E パターンは、前期現代韓国語のみ漢語動詞として現れる場合である。このパターンに属する「休暇」の場合、日本語では前期現代語と現代語両方とも漢語動詞として現れていないが、前期現代語よりも以前に漢語動詞の用例がみられる。

(29) 暑中休暇しません。

(『読売 (1894)』)

「休暇」は、(29) から分かるように日本語では漢語動詞として現れているが、本稿で日本語の資料として用いている『読売』と『太陽』両者とも前期現代語以前でのみ現れ、それ以降は筆者の調べた限り、見当たらない。

以上、日韓両言語の現代語と前期現代語における漢語動詞の形態の考察を行った結果、その特質は三つにまとめられる。

まず、一つ目は、日韓両言語とも前期現代語においてはスル形と hada 形が主に使われ、現代語と同様、対応している点である。次に、二つ目は、現代語になってから日本語に比べ、韓国語の方が漢語動詞の形態を取らなくなっている点である。スル形にほぼ固定化している現代日本語に比べ、様々な形態を取る現代韓国語の様相についてどう解釈すべきか今後考察を深める必要があると考えられる。最後に、三つ目は、語彙によっては意味の変化に伴って、漢語動詞化に影響が及んでいる点である。

4. おわりに

以上、日韓両言語の現代語と前期現代語における漢語動詞の形態について対照言語学的考察を行った。その結果、前期現代語ではほとんどの場合においてスル形と hada 形との間には整然とした対応関係がみられるが、現代語になってからは韓国語において hada 形をとる漢語に制約が生じ、hada 形以外の形式をとる場合がみられることが分かった。

今後の課題として、日韓両言語における近代語及び中期語までを考察の範囲に加え、それぞれの言語における漢語動詞形成のプロセスや変遷の様相を明らかにし、さらに日韓漢語動詞を対照考察をしたい。

(ちょへじん・言語文学専攻)

参考文献

- アン・イエリ (2014) 「 사라진 '2음절 한자어+하다' 용언의 유형 (無くなる「2音節漢字語+hada」用言の類型) 」『国語史研究』18
- 生越直樹 (1982) 「日本語漢語動詞における能動と受動——朝鮮語 hada 動詞との対照——」『日本語教育』48
- 佐藤武義 (1995) 『概説日本語の歴史』朝倉書店
- ソ・ジョンス (徐正洗) (1975) 『동사 ‘하’ 문법 (動詞「ha」の文法)』螢雪出版社
- チェ・ヒョンベ (崔鉉培) (1929) 『우리말본 (我が文法)』正音社
- ミン・ヒョンシク (閔賢植) (1995) 「국어 어휘사의 시대구분에 대하여 (国語語彙史の時代区分について)」『国語学』25
- 村木新次郎 (1991) 『日本語動詞の諸相』ひつじ書房
- 山田孝雄 (1908) 『日本文法論』宝文館

山田孝雄（1936）『日本文法学概論』宝文館

ユ・キョンミン（2005）「‘X 하-’ 와 ‘X 되-’ 및 ‘X 시키-’ 의 대응쌍 연구（「X+ha」と「X+doe」及び「X+siki」における対応研究）」『国語学』46

ニュースライブラリー（東亞日報） <http://newslibrary.naver.com>

ヨミダス（読売新聞） <http://www.lib.hokudai.ac.jp/databases>